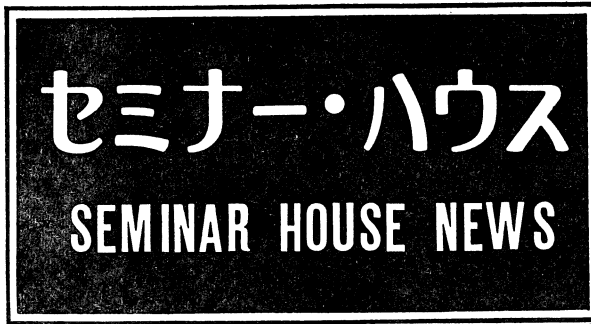


第42号 50円

昭和51年 5月25日

内容

明日の世界を考える..... 1
 第32回理事会..... 2
 開館十周年お祝い募金報告..... 2
 千人会報告..... 4
 大学の枠を越えたある連帯..... 5
 第4回共同セミナー委員会..... 6
 卒業に際して..... 7
 『東洋文化と日本』を読んで..... 7
 館長日記から..... 9
 年間業務報告... 8 利用状況... 9



発行

財団法人 大学セミナー・ハウス

《所在地》

東京都八王子市下柚木 (☎192-03)

電話 0426-76-8511~3 振替口座 東京 74590番

《東京事務所》

東京都中央区日本橋本町3-3 三井銀行本町支店ビル5階

電話 東京 (241) 3961

編集・発行人・飯田宗一郎

製作 中央公論事業出版

ローマ・クラブの二つの報告書には、現在の人類が直面する二つの危機が示唆されています。第一は人間と自然とのギャップ、第二がいわゆる南北問題です。

人類は、科学技術の進歩と経済の合理的な行為で、有限の自然と無限の人間欲望との緊張処理に努力してきましたが、その方法が市場の論理であったため、市場外の問題から今日のギャップの問題が生まれたわけです。すなわち、一八世紀以降、産業文明、技術文明という形で展開したヨーロッパ文明は、政治的には権力の論理、経済的には資本の論理というメカニズムによって支配されてきました。そこで市場関係が成立する場合は、非市場的な世界が社会的コストとして当然視されたが、それが限界に達してしまや自然と人間とのギャップのつびきならぬことになったのです。

他方、南北のギャップという問題は第一の危機と相互に絡みあっています。産業化は北の国々を中心に進展したのに対して、南の国々は権力の論理によって植民地化され、したがって、産業化も民主化もすつかり遅れてしまいました。ドイツや日本などの一九世紀的な後進国が、先進国イギリスに追いつくことの容易であった原因の一つには、初期条件の中で、科学技術の進歩が緩慢であったために、技術革新からくるインパクトが比較的弱く、経済変化に対す

る社会的適応も容易であったことがあげられます。ところが、今日の南の国々の開発起点における初期条件には、一九世紀とは比較にならないほど大きなハンディキャップに直面しています。戦前の植民地体制下において、あくまでも宗主国の政策の手段としてのみ取り扱われた結果として、現在、政治的に独立したとしても、その植民地的な後遺症としてのさまざまな経済的・社会的要因や制度が経済発展の大きな妨げになってい

ます。さらに加えて、戦後のもの凄



明日の世界を考える

開館十周年記念シンポジウムから

一橋大学名誉教授

板垣 與一

支配していますから、この強者に有利な論理が放置される限り南北間の不平等化傾向はますます拡大する一方です。

人類が直面しているこの危機を乗り越えるには、南北間の自発的な合意による何らかの国際的な規制を必要としますが、この合意を妨げるような固い壁がほかならないナショナリズムの問題です。ほんらい南北間のギャップは、先進工業国の経済ナショナリズムと後進途上国の経済ナショナリズムとのギャップの問題であり、この関係

い技術進歩からくるインパクトです。すなわち、生産技術の面で多少ついていくことができて社会的に適応する時間的な余裕がありません。南の国々が、政治・経済・社会・文化のナショナルシステムを、その民族にとつての独自の類型として鍛えあげるには相当の時間と努力を要する至難なことであるかと思われま

調整のためには単に政策面だけでなく、制度の枠組にまで発展させる努力が必要です。先進工業国の場合、ナショナリズム展開の第一段階の時代には、「集権的統一」のために、政治的には絶対主義、経済的には重商主義という政治経済体制をつくりあげ、フランス革命、産業革命以後の第二段階では「民主的自由」のために、政治的には民主主義、経済的には産業主義という体制をつくりあげ、一九世紀後半にはいわゆる国民国家・国民経済・国民文化という体制が一応完成しました。ここに至るま

でに実に二五〇年を要したもので、すなわち、先進国はかつての苦しみを今日では忘れて、南の国々の切実な諸要求を単に反発的・感情的なナショナリズムだと考えています。

私はなによりもまず、北の国が自己の経済ナショナリズムを抑制してトランスナショナルリズムの地平に立つ努力をしなければならぬと思います。また南の国々は、必ずしもかつての先進国と同じパターンではありませんが、やはり民族国家の統一と自由、あるいは国民経済の統合と自由という原理的には同じ課題をもっています。産業化の過程としてみれば、発展途上の際には成長原理が強く表に出て、一定の水準までくると福祉原理が出てくる、という形で段階的にさまざまな類型の国民経済が形成されていきます。ここでは先

進国と後進国との間が一直線に並ぶのではなく、さまざまな類型の国民経済の多様な統一として形成されるような世界でなければなりません。

しかし、そのような世界が出来る前提条件として、北と南との間にはもはや単なる能率原理を越えた平衡原理に基づく国際協力の理念が作用していないければなりません。しかもこの国際協力は単なる理念の高みにとどまることなく、南北のナショナルリズム・ギャップを克服するために、「ア・マ

第32回理事会

昭和51年3月8日
丸の内・銀行クラブ

【出席者】

正田建次郎、茅誠司、中村哲、
村井資長、久野洋、戸田修三、勝
木保次、福原満洲雄、ヨゼフ・ピ
タウ、天城勲、佐藤朔、向坊隆、
鈴木勝(代理)、飯田宗一郎
他に委任状による出席者8名。

元理事長・終身理事、大浜信泉
先生のご逝去を悼み、理事会は先
生の長い充実したご生涯に黙禱を

●寄付者は貧者の一灯といふけれど——開館十周年お祝い募金報告

◇目 標 額——三〇〇万円

◇使用目的——講堂・大学院セミナー館・
遠来荘の什器・備品の整備

◇寄付金累計——一、八〇八、一七六円

〔昭和50年12月~51年3月〕

個性ある独自の道を進むことこ
こに十年。それは人と人が出会
うことによって創り出す理解と協
力の歴史であった。たぐさんの方
方のご好意がお祝い募金に寄せら
れている。事務局の庶務と会計の
職員は驚いたり喜んだり、さては
納得して感謝したりしながら、収
納事務に忙しい。そして最もうれ

捧げる。

【議事】

(1)昭和50年度収支決算
重油の値上がりなどによって、
事業費は予算を超過したが、利用
者が予定より多かったので、事業
収入における増収をもって、支出
増をまかなうことができる見込み
である。

(2)昭和51年度収支予算編成概要
人件費の増額分と建物補修など
の物件費の増額分の合計を約一、
三〇〇万円とすれば、その財源と
して、約半分の五〇〇万円を、宿
泊料一〇・五%の値上げによる増
収により、残りの半分を利用者の
増加と会員校以外の施設使用料の

増収により見込む。

(3)利用料金の改定
会員校の料金は値上げ幅を小さ
くおさえ、非会員校と一般社会人
の料金は値上げ幅を大きくした
(詳しくは8頁を参照)。

(4)職員給与表の改定
従来、二表であったものを、一
般事務職員、技能・労務的職員、
教育プログラムを担当する職員、
中高年齢者と家庭婦人による職員
という四種の表を設ける。
(5)定年規定の改訂
(6)役員的人事
5月の評議員会に提案する理事
および監事、評議員の改選人事を
協議する。

るのであろうか。

■ご支援を感謝して
拝受いたしました

一五、〇〇〇円 地元懇親会出席者
石井栄治殿
石井竹松殿
石井兵庫殿
伊藤義一殿
上原 博殿
栗原清吉殿
小泉勇二殿
一〇、〇〇〇円 多摩設計コンサル
タント 鈴木 健殿
二、〇〇〇円 電気通信大学教授
石井正博殿
二、〇〇〇円 東京都立大学助教授
国井隆弘殿

三、〇〇〇円 中央大学 近藤ゼミ殿

二、〇〇〇円 慶応義塾大学助教授
山岸 健殿

五、〇〇〇円 青山学院大学
羽田ゼミ殿

二、〇〇〇円 明治大学教授
篠崎 武殿

三、〇〇〇円 日本大学教授
高須裕三殿

五、〇〇〇円 東京家政学院大学
家政学原論ゼミ殿

三、〇〇〇円 青山学院大学
佐藤ゼミ殿

五、〇〇〇円 東京都立大学助教授
久世寛信殿

六、〇〇〇円 中央協同組合学園
小橋ゼミ殿

一、〇〇〇円 東映生田スタジオ
伊藤隆造殿

二、〇〇〇円 近藤喜美殿

五、〇〇〇円 小西六写真工業労組
高野 守殿

二、〇〇〇円 ボーイスクウト二六〇
団委員長 山口弘幸殿

三、〇〇〇円 赤十字語学奉仕団殿
法政大学 安井ゼミ殿

二、〇〇〇円 東映企画 栗田忠俊殿
京都府文化事業室
鈴木正康殿

八、〇〇〇円 早稲田大学講師
孫田良平殿

五、〇〇〇円 東京大学助教授
公文俊平殿

三、〇〇〇円 当ハウス職員
大神田正儀殿

一〇、〇〇〇円 杉野女子大学
田村ゼミ殿

(1頁よりつづく)

「ター・オブ・ネセシティー」として
協力せざるを得ないような実行
可能な秩序の枠組として制度化さ
れるのでなければならぬので
す。「能率」「競争」「市場」の地
平から「衡平」「協力」「秩序」の
地平へとわれわれの視界を押し拡
げることによってのみ、「明日の
世界」への挑戦に立ち向かえるの
です。
(文責・編集者)

五、〇〇〇円 法政大学教授
角瀬保雄殿

三、〇〇〇円 東京大学生産技術研究
所教授 大井光四郎殿

一〇、〇〇〇円 日本イエス・キリスト
教団 荻窪栄光教会殿

一〇、〇〇〇円 東京理科大学
大沢ゼミ殿

五、〇〇〇円 東京工業大学教授
市川惇信殿

五、〇〇〇円 元中央大学総長
升本喜兵衛殿

三、〇〇〇円 公認会計士
高山利勝殿

五、〇〇〇円 東京大学教授
最上武雄殿

二、〇〇〇円 東京大学教授
朽津耕三殿

五、〇〇〇円 おさひめ幼稚園
伝田英三郎殿

一〇、〇〇〇円 三青社社長
竹内喜夫殿

五、〇〇〇円 東京工業大学教授
末武国弘殿

千人会

Philanthropy

現実と論理のかけ橋に

「二二一人の意味するもの」

理解ある協力者が金銭的負担を
することに、よって経営に参加す
る。この新しい連帯が国公私立
の大学共同の広場をつくる。

◆現在会員は、二二二名です
大学人 二九六二名
社会人 二五九名
(51年3月末現在)

◆新しく会員となられた方々

〔第31回報告(申込順)〕

- C 専修大学助教授 竹村憲郎殿
- B 東京大学助教授 玉野井芳郎殿
- B 立教大学助教授 高橋康之殿
- A 工学院大学助教授 須田精二郎殿
- C 法政大学助教授 芥川龍男殿
- C 津田塾大学助教授 矢沢修次郎殿
- B 名古屋大学助教授 飯田経夫殿
- C 東京大学助教授 柳田博明殿
- C 東京大学助教授 海老根宏殿
- C 東京大学助教授 肥前栄一殿
- C 東京都立大学助教授 峰岸純夫殿
- C 主婦 水谷松子殿
- C 主婦 桜井育子殿
- B 東京大学助教授 川端香男里殿
- B 中央大学助教授 外間 寛殿
- B 東洋大学助教授 白川和雄殿
- A 学習院大学助教授 木下是雄殿
- C 東京大学助教授 佐伯彰一殿
- C 慶応義塾大教授 神山四郎殿
- B 東京大学助教授 和田英一殿
- B 明治薬科大教授 鈴木友二殿
- B 東邦大学教授 本吉修二殿
- C キリスト教学校教育同盟 木島康彦殿
- C 主婦 池川郁子殿
- B 明治学院大学助教授 伊藤千秋殿
- A 武蔵大学長 岡 茂男殿
- B 東京大学助教授 小野沢精一殿
- B 法政大学助教授 上山 碩殿
- A 明治学院大教授 齋藤国治殿
- B 東京大学助教授 猪瀬 博殿
- B 同志社大学東京分室 長野 武殿
- C 東京大学助教授 内藤 博殿
- A 早稲田大学助教授 田村康男殿
- B 東北大学助教授 仁科雄一郎殿
- C 北星学園大学助教授 土橋信男殿
- C 図書印刷社員 郡司正志殿
- B 中央大学助教授 玉田啓八殿
- C 中央大学助教授 伊藤成彦殿
- B 武蔵大学助教授 村田晴夫殿
- B 中央大学助教授 犬井鉄郎殿
- C 法政大学助教授 角瀬保雄殿
- B 三井生命社員 飯田憲治殿
- B 独協大学助教授 白井久和殿
- C 当ハウス職員 大神田正儀殿
- C 日本大学助教授 瀬川 渡殿
- C 勸業学協会職員 菊池雄二殿
- C 神奈川大助教授 大友賢二殿
- B 東京都立大教授 矢沢大二殿
- A 日本大学顧問 東 季彦殿
- B 早稲田大教授 山岡喜久男殿
- 終身 理化学研究所理事 森脇大五郎殿
- A 東京外国語大学長 坂本是忠殿
- C 武蔵大学助教授 鈴木 満殿
- C 専修大学助教授 柘植敏治殿
- B お茶の水女子大学助教授 瀬野信子殿
- B フレンド学園理事長 布川角左衛門殿
- B すみれ幼稚園 浦野伊和子殿
- C 法政大学助教授 大谷禎之介殿

◆会費ありがとうございました

昭和51年2~3月 (敬称略)

- 稲毛卓二遺族、近藤圭一、飯田宗一郎、最上武雄、寺東寛治、本吉修二、久世寛信、大須賀政夫、乾崇夫、藤永鉄雄、村田晴夫、荒川孝子、師岡孝次、大神田正儀、南美枝子、山岡喜久男、慶伊富長、望月継治、布川角左衛門、河田喬夫、石井正博、板垣雄三、沢本孝久、鯨岡久、伊藤満、石川静一、

- 吉田修三、吉川春寿、良知力、岩佐凱実、吉田公保、今道友信、脇田良一、小林清子、池井優、矢田俊文、村井資長、東川清一、吉田耕作、平岡勇、谷資信、塚本寿一、川瀬謙一郎、宮野彬、大即英夫、金子ハルオ、篠崎武、半谷高久、板橋並治、黒沼稔、小林望、新保清子、葛岡常雄、小泉明、北村嘉行、松田正一、山口俊夫、小川政亮、石井不二雄、山下幸夫、秋山虔、一丸節夫、蓮見音彦、力石誠之介、瀬在良男、中岡二郎、佐藤頌子、鐘ヶ江信光、渡辺忠市、大岡信、子安宣邦、高松正昭、久保亮五、斎藤真、岡村勝、佐藤直子、勢山秀子、高村新一、村上泰治、榎崎彰男、井原恵治、山崎俊雄、福本日陽、西村章子、田内幸一、飯野和彦、吉阪隆正、箕輪成男、昌谷春海、三神勲、瀬部孝、豊田陽子、磯直道、西川恭治、富塚文太郎、原田敬一、上野一、松島千代野、中島徹、馬越徹、松本武子、今井清一、上山碩、笠耐、肥前栄一、若林玄修、谷口汎邦、田中久兵衛、五唐勝、東洋、飯泉信、原芳男、遠藤卓夫、平野鉄太郎、中島力、梅村魁、正田建次郎、北野弘久、増沢利幸、佐藤毅、那須宗一、山沢逸平、須賀恭一、牛島忠広、桜井育子、西村閑也、井村君江、中村妙子、緒田原洞一、細井勉、杉山逸男、永井道雄、永野賢、山田良之助、人見宏、大西清、遠藤平治、角尾稔、松尾弘、小島慶三、市川邦彦、早坂泰次郎、三浦忠夫、本間仁、柴田泰比古、所司真理子、島田治夫、須藤秀治、一松信、西勝、萩原稔、中村孝之、工藤英明、大塚正夫、土居健郎、村松林太郎、白川和雄、岡村總吾、土井恵美子、山本武彦、瀬川美能留、小山五郎、八木江恵、末武国弘、池田義人、太田末穂、村上千賀子、高瀬文志郎、大河内正陽、谷口茂、木田宏、土橋信男、加藤六美、佐藤公孝、近藤薫樹、守屋美賀雄、齋藤幸一郎、護雅夫、浅野弥祐、満田郁夫、原一雄、吉谷龍一、春田素夫、鈴木友二、朝永振一郎、向坊隆、手塚喬介、竹田政民、小倉芳彦、加藤寛、石原忠男、三上次男

▼入会の「ところ」を探る

今年の誕生日で満七〇歳になりますので記念に入会いたしたく存じます。

理化学研究所理事 森脇大五郎

♡

大学三年のとき坂手ゼミナールで利用させていただき、今回で二回目です。今年は卒論のまとめと

三月に海外旅行をするので、学生生活最後にガッチリ学習しようとして利用しました。まだ微力ですが協力させていただきます。

♡

開館七周年記念式典のお手伝い (5頁4段目へつづく)

大学の枠を越えたある連帯

●●個性ある交流の原型として●●

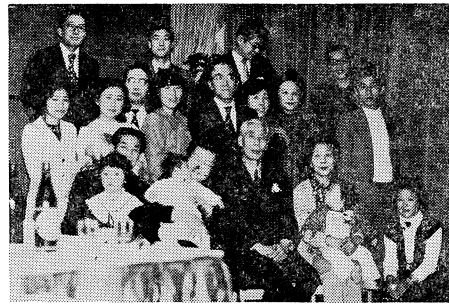
開館十年の歴史をひとことで、大学の枠を越えた学生交流の歴史というならば、ここに紹介する二つの事例はその証明であろう。日本の社会では、このような新しい形式の連帯の意味は高く評価されてよいことだろう。

●睦蟬会十周年の集い

昭和51年2月7日(霞山会館)

初めて学生の自主的な企画・運営による共同セミナーが実現したのが、開館二年目に当たる昭和41年7月の第6回「大学の理念と現実」のセミナーであった。相次いで発生する学生騒動によって、日本の大学が「大学とは何か」を問われ始めたときであったから、多感な学生達がこのようなテーマで討議しようと企画したのも当然のことであったのである。この共同セミナーで全体講義をされた東京工大教授永井道雄氏は現文部大臣であり、東大教授前田陽一氏は現国際文化会館専務理事である。

当時、学生委員であった面々が睦蟬会と称するOB会をつくり、勉強会や旅行などを通じて親交を深め、社会人となった現在も変わらぬ交流を続けている。この度、幹事役の芳山邦弘氏(早大卒、出版社勤務)の呼びかけで、十周年



睦蟬会十年目の顔

の集いが虎の門の霞山会館で行われた。十年経ったら必ず一堂に会することを誓った八王子の丘の上での約束が実現したものである。米国ワシントン大学に留学中の海老沢克之氏、メンバー同士で結婚され大阪に在住の犬塚博、久子夫妻を除き、次の諸氏が出席した。飯尾右一、黒田まゆみ、伊藤修、小林典子、藤本紘と、子供連れの桜井育子夫妻、宮川俊彦夫妻の合計11名(敬称略)。

招待を受けたのは、東京女子大教授白井常氏、早大教授川原栄峰氏、上智大教授鈴木皇氏、日本女子大女子教育研究所員山本和代氏、それに飯田館長夫妻と彼らの共通の友人飯田能子であった。

●社会人セミナー 《生涯教育の小さな実験》

奥 繁光

私達は秋も深い昨年11月下旬の連休に、第6回社会人セミナーを開いた。五日市の国民宿舎で開いたセミナーから四年半ぶり、大学セミナー・ハウスで開くのは第4回セミナー(67年10月)以来二度目のことである。

60年安保当時の卒業生が63年秋に読書会を發展させて開いたセミナーが始まりで、今回は卒業七年目になる三人の仲間が春から準備に取り組んだ。すでに四〇歳近い商社マンから労組書記長、高校教員、大学講師、営業マン、新聞記者、自営業やベンチャービジネスの社長、それに学生まで三〇人ほどの参加者が二泊三日で語り合ったのである。

一人一人が職業や体験、悩みを報告、その話を基に質問や討論を進めていった。とくに司会者は決めず、できるだけ時間の制限もしないで、何か結論を出すよりは、「こういう問題に自分はこう対処してきた。あるいはこう考えるべきだと思ふ」と各人が考えを出し合い、自分の言葉で自分の心と言えるまでに対話を深める——これが何回かのセミナーを通してつくり上げられて来た社会人セミナーである。もちろん多少の混乱はつきもので、話はどうん発展、深夜に及んでしまった。

(4頁よりつづく)
以来のご縁ですが、常々大学セミナー・ハウスのすばらしさには驚きをもっております。音楽を通して今後共一緒させて頂きます。
国立音楽大学専任講師 佐藤公孝

人の世に役立つ勉学学生のためなら、いくらでも応援したい気持ちです。ところで、しかしこの年(六三歳)ともなると持続性に自信なく、当方の都合のよい時だけ払わせて頂くことにして、結局一〇万円を至急お送りしたい。
工学院大学教授 葛岡常雄

♡
セミナー・ハウスで学んで十年になりました。まだ千人会の会員になる資格はないと思ひ、今までは決心できませんでした。しかしとうとう私も三〇回目の誕生日を迎えることになり、自分の生きて

な意味をもった時期であった。卒業後、何年かたつと職業、家庭はもとより頭の中まで大きなズレが出て来る。学生時代の問題意識・直観力・怒り——それらを私達の多くは生活のために職場や家庭で妥協し、忘れようとしている。社会人セミナー参加者の報告は、問題意識を持ち続けようとする人間の戦いであり、淡々とした言葉の中に、驚くような体験があり、深い悩みがあり、感動がある。五年先の自分の姿を先輩の言葉に感じ、五年前の自分を後輩の中に見

いる証しを、自分でしてもよいと思えるようになりました。八王子の丘でお会いした先生、先輩、学友の面々を想い浮かべながら自分の誕生日を大事にいたします。とりわけ飯田宗一郎先生ご一家の方への感謝をこめて入会を申込みます。
主婦 桜井育子

♡
昭和42・46年、学生時代四年間は、まことにセミナー・ハウスとは縁の深いものでした。卒業してからは一度もあの丘には登っていませんが、私にとっては故郷のようなもので時々思い出しております。
主婦 水谷松子

♡
セミナー・ハウス設立時、大学院学生として研究室で良く利用させていただきました。
工学院大学助教授 須田精二郎

る。自分はどう変わってきたか、どう変わろうとしているのだろうか——深い対話に世代の断絶などありはしない。
三日間の「御籠」から時間に追われる生活に再び戻ってきたが、また何年かするとともに若い人々の中から第7回社会人セミナーを開こうと、きっと誰かが呼びかけてくることだろう。組織も規約もないのに湧き起こってくる、この目的さえもたぬセミナー、生涯教育とはこんなものかもしれない。
(日本経済新聞社勤務)

第4回共同セミナー委員会

新年度の年間計画を議する

昭和51年1月29日18時・私学会館

昭和50年度最後の委員会は、次の一四名が出席して開催された。木村尚三郎、宇野重昭、今井淳、宮下啓三、大谷啓治、大東百合子、川島重成、湯沢雅彦、江沢洋、鶴川馨、岡宏子、野口武徳、深沢宏、山本満(敬称略)

議事は、まず共同セミナーの報告から始められ、第80回を木村委員、第81回を湯沢委員、第82回を宇野委員からそれぞれ企画・運営の担当者として実施報告が行われた。

つづいて本会議の主たる目的の昭和51年度共同セミナー年間計画の細部については、新年度の委員会に譲ることとなった。

協議に移った。すでに数人の委員から提案されているテーマを軸に、年々行事化されている二、三のセミナーの今後の扱い方などを検討し、予算として計上されている年七回分のセミナーについて、ほぼ計画の大半を決めた。すばらしい成果を挙げて次年度の委員会に申し送ることができたわけである。

大学共同セミナー開催予告

第84回 神話・文学・聖書

6月18～20日

主題について

- A 叙詩「オデュッセイア」の成立
 - B ギリシャ悲劇「アガメムノン」を中心に
 - C アウグストゥス時代のラテン文学
 - D 古代オリエント神話・文学と旧約聖書
 - E イエスと福音書文学「放蕩息子の譬」によせて
 - F パウロの人間理解
- 講師：秀村 欣二、久保 正彰、川島 重成、中山 恒夫、後藤光一郎、荒井 献、佐竹 明

第85回 アメリカ合衆国(仮題)

10月8～10日

主題について

- 建国二〇〇年に因んで

第86回 古代アジア史上の日本

10月22～24日

故大浜信泉先生追悼セミナー

私の大学生生活と セミナー・ハウス 卒業に際して一言

佐藤 敬

8回。これが私の参加した共同セミナーと国際学生セミナーを合計した回数である。学生服姿で初めて「出会いの丘」に立ったのが一年生の12月。当時の日記にこう書き留めている。

「今日の自分はただ聞くばかりであったけれども、未知のこともいろいろあり、じっくり考え直さなくては、という思いがした。：：太陽がちょこっと見え、次第に姿を現わす。富士もうつすらと見える。すがすがしき。今だけのものにしたいくない。鐘の音が『独創的』ハウスの屋根の上を渡っていく。」

「出会いの丘」に立つことが日常の生活に対して、ある種の心地よい刺激剤となっていたように思う。セミナーではスケジュールの裏側、あるいは余白の生活を仲間と共にいるところにその良さがあるのではないだろうか。セミナーに受身のままであってはならぬ

いのである。そして、この丘で実に多くの人々と出会い、再会を期して別れた。ところが実際、再会することはなかなか難しいことである。人と会うこと、それは一期一会であるかもしれない。8回のセミナーを通して、その言葉の深さが少しではあるがわかってきたように思う。このような機会を与えて下さった飯田館長をはじめ職員の方々に心より感謝いたします。(慶應義塾大学法学部政治学科卒)

八木 沢 仁

日本の大学が閉鎖的であるという現実、大学間の、あるいは専門分野間の誤解を生む大きな原因になっていると考えられる。そのような誤解を解消するためにも、大学間交流の必要性はますます重視されねばならないと思う。

大学卒業を迎え、顧みると僕の友人関係はセミナーに参加したのを境に飛躍的に拡大している。セミナーに参加しなかったなら、おそらく巡り合わなかった人々と批判し啓発し合うのは、厳しいが実に楽しいものである。

僕らがセミナー・ハウスを利用できるのは、いうならば「学生」という身分に支えられた特権の一つである。それだけにセミナーでの経験を、恵まれた者達の「楽しい青春の『思い出』づくり」に終わらせてはならないと思う。セミナーへの参加を、各自の、あるいはグループの、何らかの出発の契

機とすべきである。今後は大学院生としてセミナー・ハウスへ来る機会もあると思うが、新たな「貴重な体験」を期待している。(東京大学理学部生物科学科卒)

植木 安 弘

私の大学生活は、失恋によって初めてあるがままの自己と対峙するという経験から始まった。そして次第に学生から遊離していった学生なき学生運動には傍観者として挫折し、クラブの組織と個人という問題にぶつかり、理念と現実のギャップの苦悩の中で主体者として挫折し、やがて、特にゼミを通して私の教師観、人生観、勉学への姿勢も少しずつ変わっていった。そして大学時代の最後の遍歴が大学セミナー・ハウスでの知的出会い、人間的触れ合いであった。様々なパーソナリティとの出会い、先生の一個のパーソナリティとしての受容、自己変革の場がそこにはあった。学生の甘えと同時に、参加主体の「生きる」ことに対する誠実もあった。

そこには実際、既存の大学の枠を越えた多くのものが可能性としてわれわれの前に存在している。その可能性をいかにか掘り起こし、かつ具現化するかは、われわれ自身の課題であらう。

(上智大学外国語学部露語学科卒)

書評

『東洋文化と日本』
を 読 ん で

一橋大学名誉教授
増 田 四 郎

昨秋、大学セミナー・ハウスが
開館十周年を迎えたのを記念し
て、論集『東洋文化と日本』が公
刊された。内容は十篇の論稿から
成っているが、いずれもここで
おこなわれた共同セミナーでの諸先
生の講演ないし講義をもとにした
ものである。

私は記念のお祝いの日には出席
できなかったが、早速、飯田館長
が一本を寄贈して下さいだったので、

直ちに全篇を読了し、啓発される
ところきわめて大であった。ここ
にあらためて、編著者である三
枝・今井の両先生をはじめ、この
セミナーに協力して下さいた多く
の先生方に敬意を表したいと思
う。

およそ一国一民族の文化は、そ
れとかかわりのある他の諸文化と
比較・勘考することによって、は
じめてその特色が明らかとなる。
学問研究の国際交流がいよいよ密

となつて来た今日にあつては、こ
の困難な課題と真剣にとりくむこ
とは一層の緊要事であろう。その
意味で、この共同セミナーの企て
は、きわめて時宜になつたもの
で、そしてまた若い人たちに新し
い問題視角の重要性を具体的に示
めたものというべきである。

ここでとりあげられている問題
は、かなり多岐にわたっている。
まず「東洋」とは何か、その中で
の日本をどう位置づけるべきかと
いう将来の課題を総括した山本達
郎氏の含蓄ある総論について、そ
れぞれの専門の諸先生による諸問
題へのアプローチの仕方、すなわ
ち日中両文化の同質性と異質性、
その型のちがいが、仏教思想の日本
人によるうけとり方、仏教の真理
観、古代の日本が置かれていた国
際環境、日本人による漢文のうけ
いれ方、近世日本思想史における
仏教および儒教の影響等の問題が
論じられており、巻末にはこのセ
ミナーに参加した学生諸君をまじ
えてのシンポジウム「東洋と日本」
の記録がのせられている。一読し
て読者はまるでこの貴重なセミナ
ーに参加した一員であるかのよう
な親しみを感じうるであらう。

十篇から成る本書の内容の一々
については、私の所感を申し述べ
いとまはないが、正直いって私に
はどの論稿も大変有益であった。
こうしたテーマについては、一般
には大変むずかしい専門家の研究
書か、さまなければ思いつきのな

文明評論風の類書が多いが、本書
には、そのいずれでもないつぎの
三つの特色がそなわっており、日
本文化の在り方を考える絶好の手
引き書となつている。

まず第一の特徴は、セミナーで
の講義ということもあつて、本来
ならば大変むずかしい問題を、き
わめて平易に解りやすく述べられ
ているという点である。仏教の考
え方など、このように説かれる
と、私も門外漢にも大変身近か
に理解できる。第二は、包括的で
多面的でありながら、共通して日
本文化ないし日本人の思考の底に
流れるものを、具体的にしめそう
としていく点である。外来文化の
摂取受容とひとくちで表現してい
ることの内容が、いかに複雑なもの
であるかを考えるのに役立つ。

そして第三は、どの論文も、いず
れもその道の専門領域を長年専攻
された諸先生によるこなれた説明
であるため、私も素人も安心して
て論旨をフォローできるといふ点
である。研究途上で日ごろ考えて
おられることの要点がにじみ出て
いるという感が深い。

◆寄贈図書

昭和50年7～10月

- 「政治経済史学」一〇九～一一三
政治経済史学会贈
- 「早稲田フォーラム」9
早稲田大学広報課贈
- 「社会人の英会話」続・こんなと
き英語でどう言うか」「実用英語
三人会話」「ハローフランス」
「英語一分スピーチ」
トミー植松殿
- 「ヤスパースの実存哲学」「イエス
とアウグスチヌス」 林田新二殿
- 「文芸と自然」
共立女子大学文芸学部贈
- 「近代ドイツ演劇」 宮下啓三殿
- 「Asian Culture」10、「アジアは
生きていく一人と祭り」
ユネスコ・アジア文化センター殿
- 「続折にふれて」佐藤喜一郎追悼
の必要についてである。すなわち
その一つは、比較文化論とか比較
社会史の研究についての厳密な方
法の確立はどうすれば可能かとい
う問題である。いままでは、なん
といても西ヨーロッパの学界で
編み出された方法が基準であつた
が、これからはもうそれを鵜のみに
にすることは許されない。方法論
についての論議がさかんになるこ
とを望みたい。いま一つは、思
想・芸術・宗教といった面からの
- 「録」 三井銀行調査部贈
- 「工学院大学研究報告」 36・37号
工学院大学図書館贈
- 「キリスト教文化研究所紀要」3
聖心女子大学同研究所贈
- 「創」9月号「社会事業法制と社会
保障」 笠原正成殿
- 「国際交流」6 国際交流基金贈
- 「熱くなる大都市」 尾島俊雄殿
- 「大学とは何か」 久山 康殿
- 「エナジー対話・人間と数学」
エッソ・スタンダード石油贈
- 「ルカスによる福音書」 日本聖書協会贈
- 「体系経済学辞典(改訂新版)」
高橋泰蔵殿
- 「佐渡叢書」第一～六巻、「北溟雜
誌」第一～五巻 松井源吾殿
- 「現代を生きぬく知恵」「学校相談
心理学の展開」「道徳教育の心理
と方法」「開発的カウンセリング」
「道徳教育の研究」 神保信一殿
- 「日本の土木技術」 土木学会贈

比較と並んで、家族・氏族・部
族・村落・都市・国家といったも
ろもの社会集団にみられる団体
意識の比較がおこなわれなければ
ならないという問題である。ここ
では当然、比較社会学的な方法に
よる学界の協力が必要となるであ
らう。

大学セミナー・ハウスが、今後
ともこうした方面で、みのりゆた
かな成果を挙げられんことを切望
するものである。

年間業務報告

昭和50年度は次の三点において記録をつくった年であった。

第一は、年間の宿泊延人数四万五、二九七人、宿泊実人数二万五、六二四人、ゼミ回数九九二回のいずれもが新記録であること。

第二に、月間の宿泊延人数が7月において五、七七七人(今までの最高記録は昭和44年7月の五、二四四人)の大会をマークしたと。

第三に、今までの利用状況が季節に左右されて、月によっては一、〇〇〇人台、二、〇〇〇人台と

いうようなこともあったが、50年度は毎月三、〇〇〇人を超えたこと。

したがって表1に示すように宿泊延人数は月平均は三、七七五人となり、収容定員二四〇床として宿舍の稼働率を換算すると五四%となる。五〇%を超えた月は4、7、8、10、12、3月の六ヵ月で、さらに開館日数を基礎に算定すれば6、9月もこれに加えることができる。

このように50年度はまさに十年の節目にふさわしい利用者的大幅増加をみる事ができたわけである。

次に利用状況を利用者別でみると、表2のようになり、ゼミ回数によって利用の頻度を示すと、大

学連合を含め、全体の約八〇%が大学・学生が利用していることになり、当ハウスの事業目的に即してみれば、概して満足すべき方向にあるといえよう。なかでも会員校の利用が前年度に比較して伸びていることは、会員校の中にその基盤を持つ当ハウスとしては、まことに好ましい傾向であるといえよう。

次に、会員校利用状況をみると利用回数においては四年連続で東京都立大学がトップに立ち、しかも六〇回は、48年度以来、三年間連続同数を記録したことになる。

一方、宿泊延人数においては、早稲田大学の一、六六九人が最多利用で、前年度の東京大学一、五一八人より一五一人多くなっている。

なお、面白いことは、ゼミ回数では上位六校が、宿泊延人数では上位四校が、前年度と若干順位が入れかわっただけで、同じ大学で占められていることである。昭和51年度は、後につづく会員校の利用増加を期したいものである。

特に、この一年間、ゼミでよく利用して下さった先生方のお名前を記し、その教育愛に敬意を表したい。

- 15回 神保信一(明学大)
- 5回 十代田知三(芝浦工大)、川原栄峰(早大)
- 3回 田村皖司(杉野女子大)、鈴木博(東大)、今井則義(法政大)、大沢綱一郎(理科大)、松田武彦

宿泊・食事料金改定のお知らせ

(昭和51年4月1日実施)

▷食事料金(定食) ()内は改定前の料金

朝食	昼食	夕食	計
300円 (250円)	450円 (400円)	550円 (500円)	1,300円 (1,150円)

▷宿泊室料金(1泊につき)

<ユニットハウス>

	学 生	教 師
会員校	950円(700円)	1,250円(900円)
非会員校	1,150円(850円)	1,500円(1,100円)

▷施設利用料金(1日につき)

	会員校	非 会 員 校
講 堂	無 料	15,000円(13,000円)
学 院	無 料	10,000円(7,000円)
中 心	無 料	7,000円(6,000円)
中 小	無 料	6,000円(5,000円)
セ ミ ナー	無 料	5,000円(4,000円)

〔表2〕利用者別宿泊人員・ゼミ回数 ()内は前年度数

	ゼミ回数	比率(%)	宿泊延人数(人)	率(%)	1団体平均人数
会 員 校	636 (582)	64	18,620(16,940)	41	19
非 会 員 校	114 (118)	12	7,516(6,358)	16	40
学 会 連 合	16 (29)	2	2,082(3,173)	5	66
学 会 教 育 団 体	123 (85)	12	10,895(7,151)	24	38
学 会 社 会 団 体	103 (95)	10	5,885(5,654)	13	32
個 人			299(251)	1	1
計	992 (909)	100	45,297(39,527)	100	26

〔表3〕会員校利用状況

順位	校 名	ゼミ回数	順位	校 名	宿 泊 延 人 数
1	東 京 大 学	60	1	早 稲 田 大 学	1,669
2	早 稲 田 大 学	59	2	京 都 大 学	1,471
3	立 教 大 学	57	3	法 政 大 学	1,413
4	都 立 大 学	38	4	東 京 大 学	1,263
5	京 都 大 学	37	5	法 政 大 学	831
6	立 教 大 学	29	6	早 稲 田 大 学	831
7	法 政 大 学	23	7	東 京 大 学	791
8	法 政 大 学	23	8	立 教 大 学	707
9	立 教 大 学	21	9	早 稲 田 大 学	706
9	立 教 大 学	19	10	早 稲 田 大 学	580
9	立 教 大 学	19			
10	立 教 大 学	17			

〔表1〕月別利用状況

()内は前年度数

月	ゼミ回数	宿泊延人数(人)	定員比(%)
4	88	4,095 (3,225)	57
5	71	3,344 (4,255)	45
6	62	3,369 (2,843)	52
7	87	5,777 (4,465)	78
8	84	4,812 (4,128)	65
9	84	3,395 (3,279)	54
10	79	4,000 (3,043)	54
11	76	3,057 (3,974)	42
12	95	3,540 (3,019)	53
1	75	3,123 (1,427)	48
2	96	3,026 (2,719)	43
3	95	3,759 (3,150)	51
計	992	45,297(39,527)	54
月平均	83	3,775 (3,294)	54
1日平均	3	129 (110)	

- (東工大)、関口忠(東大)、藤沢好一(芝浦工大)、横山定雄(武蔵大)、萩原稔(専大)、西宮輝明(早大)、萩原稔(専大)、坂田長生(東海大)
- 大、大田堯(東大)、江藤价泰(都立大)、橋本敏雄(理科大)、岡本甫(東大)、三戸公(立大)、宮崎岸一(中大)、三戸公(立大)、(宿泊日数順・敬称略)

●館長日記から

古稀の春寒暖のなお定らず 離業

この4月16日に古稀を迎えられた都立大学名誉教授高峯一愚先生の句である。今年の春は気候不順でいつまでも寒かったから、古稀の心境を詠んで、千人会費の納入通知書に書き添えて下さったらしい。◆千人会費をお送り下さるごときに、短い言葉をいただくことが多い。ご好意に對し、私は心はずませることしばしばである。ご返事を差し上げる思いで領収書を書いているが、このようなお礼を書きつづけながら生涯を終りたいものと念願している。◆「いまは昔」ではじまる竹取物語のように「いまは昔、領収書に文を書き添えるセミナーの翁というもの有りけり」と人ははいいかも知れない。◆再び明治大学総長になられた武田孟先生から終身会員として千人会にご入会下さるとのお手紙をいただいた。八〇歳の高齢ではあるが永遠の武田青年である。創立当初の理事であられたご縁が帰って来たわけである。◆前明大総長春日井先生はご郷里の愛知県春日井村から県木のはなの木を大浜岬公園に植えて下さった。昭和47年3月10日のことである。立派な記念樹として名をなすに違いない。

頃である。重いご病気で病床にあられた佐藤喜一郎氏のお見舞として、このセミナーの丘から数種の花の枝を手折って持参したことがあった。胸につまる感恩の情を多摩の花々に托したのである。惜しめどもとどまらぬものは、人の生命である。◆東大建築学科の新生年生のオリエンテーションに梅村・内田・鈴木の諸教授と共に来られた芦原義信教授が「久しぶりで来たが、十年たつて、すっかり品格ができましたね」といわれた。特異な建築群が大きく成長した雑木林と記念樹の間に落ち着いた姿を現わしている。「セミナーの丘」が、つらなる多摩の丘の一角にあっても違和感もしくは場違いな感じがしない。十年の歴史があるからである。古事記の一節をまねて「セミナーの丘は良い丘だ。幾重にも連なる多摩の青垣。その青垣の丘陵の上に建っているセミナー・ハウスの品格がある」とこの丘を訪れる人々は親愛の心をもって書いてくれるであろう。◆5月初めの連休はセミナーの週間であった。グループにして二四ゼミ。個人利用が教授五人、延人員にして一、一五〇名。たのしく忙しく過ごすことができたのも健康なればこそである。◆千人会はセミナー・ハウスの友の会である。「友引」というから、どうか会員は新しい会員をつれて来ていただきたい。「友白髪」(ともしろが)というから、若い世代の会員とは白髪になるまで交わりをつづけた月を友としたい。志を同じくする人を友というならば、千人会は大学人同士がつくる友垣である。

●利用状況

* 11月2日利用
* 11月3日利用

◇2月

東京大学第三世界勉強会	鈴木 重勝	武蔵大学体育連合会	秋元 徹	北里大学助教	岩内 亮一
早稲田大学教授	羽田 三郎	東京都立大学教授	鈴木 二郎	拓殖大学第一高等学校	村 幸雄
青山学院大学教授	門脇 佳吉	東京経済大学教授	川上 正道	山梨大学教授	立正大学中国語研究会
上智大学教授	野崎 喜嗣	東京女子大学教授	白井 常	都留文科大学教授	松永 昌三
武蔵工業大学講師	近藤 圭一	東京経済大学武蔵野風土記愛好会	原 正彦	日中院講師	小池 敏明
中央大学教授	寺東 寛治	明治大学教授	小松 洋一	万国聾啞バプテスト福音伝導協会	赤十字語学奉仕団
青山学院大学講師	稲場日出男	東洋大学助教	祝男	国際経済商学学生協会	ボーイスカウト東京第二六〇団
工学院大学助手	N・ディエス	千葉商科大学助教	松村 祝男	京都市府文化事業室	日野自動車工業
上智大学教授	島田 一男	早稲田大学教授	鶴岡 義一	日野自動車工業	多摩ニューザック
上智女子大学教授	鶴見 和子	東京理科大学教授	近藤 保	多摩ニューザック	日本水産八王子総合工場*
明治大学助教	橋本 敏雄	早稲田大学教授	高橋 馨郎	スリーポンド	富士重工
中央大学「中大新報編集委員会」	松島 洋	東京都立大学助教	安平 哲二	ヤマハ発動機	ADO通信教育スクーリング
明治学院大学講師	西川二郎	東京都立大学助教	桐谷 維	日野自動車工業	東京エレクトロン研究所
法政大学講師*	盛田 常夫	中央大学講師	清水 誠	日本化学	小西六写真工業八王子工場
青山学院大学教授	佐藤 節子	慶応義塾大学教授	村越 邦男	日本航空電子工業*	一橋大学講師
青山学院大学助教	石川 信男	法政大学教授	安達 和夫	【個人利用】	一橋大学助手
芝浦工業大学助教*	十代田知三	法政大学英語劇研究会	安井 郁	一橋大学講師	佐藤 共子
早稲田大学教授	西宮 輝明	日本大学講師	徳山 龍明	小西六写真工業八王子工場	栗原 尚子
明治大学助教	岩永 達郎	早稲田大学教授	三浦 修	日本航空電子工業*	
明治大学助教	牧野 誠一	東洋大学助教	志摩 陽伍		
上智大学講師	小田中聡樹	明治学院大学教授	金井信一郎		
津田塾大学講師	小倉 充夫	慶応義塾大学助教	三浦 和男		
青山学院大学教授	鶴沢 昌和	青山学院大学助教	田村 武夫		
東京都立大学主事	小池 昇	芝浦工業大学教授	明野 徳夫		
明治学院大学助手	遠藤 興一	東京慈恵医科大学ESS			
中央大学教授	服部 正夫	駒沢大学教授	中原 章吉		
東京経済大学教授	末岡 俊二	多摩美術大学カリキュラム			
東京経済大学婦人問題研究会	入試会議				

◇3月

東京大学教養学部裁判問題研究会	荒木 廣
聖心女子大学助教	小林 寛
早稲田大学教授	

横濱国立大学助教	岡田 守弘	蹊成大学文化会	堅田 明義	法政大学教授	坂口 康	語学教育振興会	創価大学助教	伊藤 義行
武蔵大学教授	村田 晴夫	東京学芸大学助教	早稲田大学教授	早稲田大学教授	鳥越 信	瀧野川教会青年会	青山学院大学助教	岸 英朗
明治大学講師	渡辺 昭夫	法政大学教授	川上 忠雄	日本女子大学教授	徳末 愛子	音楽教育研究会	久遠キリスト教会聖書研究会	ELLEC
早稲田大学講師	孫田 良平	早稲田大学教授	伊藤 毅	東京工業大学教授	武者 利光	文学教育協議会	英語教育協議会	江草 滋
大妻女子大学教授	神保 信一	慶応義塾大学労働問題研究会	茅 陽一	明治学院大学助教	橋本 敏雄	すみれ幼稚園		
早稲田大学助教	示村悦二郎	東京大学助教	大澤綱一郎	専修大学教授	望月 清司			
東京学芸大学助手	池田 義人	東京理科大学教授	直井 優	東京経済大学教授	末岡 俊二	東急百貨店労働組合		
慶応義塾大学英語会	新田 孝二	早稲田大学助教	田村 恭	東京大学助教	鈴木 博	鹿島建設コンクリート研究会		
明治学院大学教授	志摩 陽伍	武蔵大学教授	横山 定雄	法政大学教授	大谷禎之介	日本精工野球部		
東洋大学助教	岩村 行雄	東京大学比較文学比較文化研究室	大場 義夫	青山学院大学教授	原 豊	東芝府中工場		
東京大学教授	岸 英朗	東京大学講師	小林 彌六	青山学院大学アイセック	杉野女子大学教授	田村 皖司		
東京学芸大学教授	渡辺 正雄	法政大学講師	青木 茂男	FIA英語演劇	昭和女子大学聖書研究会	独協大学講師 Mischa A. Sehibe		
立教大学教授	小林 弘	早稲田大学教授	石山 伍夫	拓殖大学第一高等学校	文京女子短期大学放送部	拓殖大学茶道研究同好会		
武蔵工業大学教授	沢木 敬郎	日本大学教授	高橋 康之	キリスト再臨待望同志会	教員養成問題研究会	創価大学坂手ゼミ幹事		
早稲田大学教授	大槻 謙二	立教大学教授	落合美智子	『道元』の論理構造	春日佑芳著			
東京学芸大学助教	鈴木日出男	東京経済大学講師	共立女子大学文化サークル新					
東京工業大学教授	松田 武彦	ICU教育問題研究会	磯 信光					
立教大学講師	小和田 恒	東京都立大学助教	磯 信光					
立教大学教授	三戸 公	津田塾大学ESS	鶴見 勝男					
東京都立大学助教	慶谷 寿信	中央大学教授	田中 香澄					
明治大学助教	岩崎富久男	千葉商科大学助教	田中 香澄					
法政大学教授	今井 則義							

編集後記

新年度の本号から、隔月発行(年6回)といたします。月刊とまではいなくても、定期に発行していくことは、一つの前進であろうかと思えます。

また、本紙の雰囲気をつわらない範囲の広告を、と考えた結果、本号からは出版広告を最終頁に掲載することにいたしました。広告第一号を、開館十周年記念論集『東洋文化と日本』の出版元であるベリかん社にお願いたしました。

『東洋文化と日本』について学問的厚重感のある書評を増田四郎先生からいただきました。厚く御礼を申し上げます。(能)

大学セミナー・ハウス
開館十周年記念論集

東洋文化

と日本

三枝充恵
今井淳 編著

この論集は第七三回大学共同セミナー「東洋と日本」の成果をまとめたものである。

収録論文
東洋と日本 山本達郎／中国文化と日本
山井湧／仏教思想と日本 三枝充恵／日本文化のかたち 湯浅泰雄／仏教の真理観
横山絃一／古代日本の国際環境 青木和夫
日本人と漢文訓読 小倉芳彦／近世における人間の自覚と中国思想 子安宣邦、野崎守英／近代日本における東洋思想の反省
今井淳／シンポジウム「東洋と日本」

四六判 二五八頁 一四〇〇円

『道元』の思想

春日佑芳著

道元の思想の意義はあくまでも行中心の立場を確立したことにある。このことを道元の言葉によって明らかにすることによって、難解といわれた『眼蔵』理解の新しい道を開いた。同時に、広く哲学とは何かという大問題に迫る。

四六判 二二四頁 一六〇〇円

宗教思想のエッセンス

●世界20大宗教の本質と展望
神道、仏教、キリスト教、イスラム教、ヒンドゥー教、ラマ教、モルモン教、ユダヤ教など世界の20宗派の歴史と本質を各専門研究者が解説する。宗教研究の決定版。

A五判 三九〇頁 一五〇〇円
仁戸田六三郎監修

ペリかん社
東京都文京区本郷2-24-4 (814) 8515